

『東方』二七八号より

よみがえった碩学の手沢本

野村 鮎子（奈良女子大学）

もし、ご先祖様に偉い漢学の先生がいたら……と夢想することがある。伝来の家蔵書には、ご先祖様が施した評点や圏点があつて、しかも文字に異同があるところは丁寧に校勘があつたり、空欄には按語や評語の書き込みがあつたりと、鈍才に苦しむ子孫を大いに助けてくれるに違いないと思うからである。

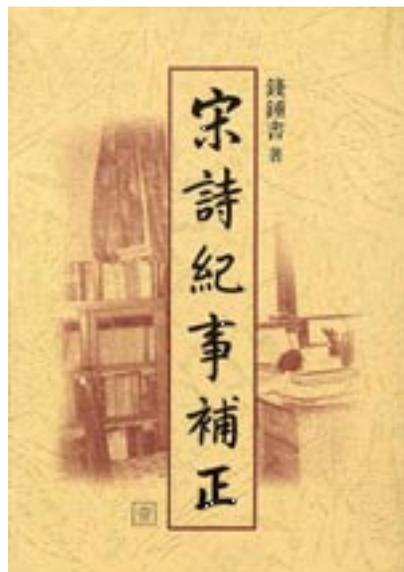
昔の碩学は、本にいろいろな書き込みをした。文字の校勘に始まり、読んでいて気がついたことや他の文献を参照して考証したことなどを直接書物の空白部分に書き込んだ。いわゆる手沢本である。書物を読む際の個人的なメモみたいなものだが、そこはそれ、碩学のメモともなると、たとえそれが片言隻語でも、さすがは炯眼というべく、研究のヒントが隠されている。私には、十年ほど前に台湾の中央図書館（今の国家図書館）で清の汪の手沢本『婦太僕先生集』（万曆刊本）を見て、身震いした経験がある。版本による文字の異同は細大漏らさず指摘してあり、疑念のある箇所には按語が付いていた。汪は明の婦有光に傾倒したことで知られるが、婦有光の曾孫にあたる婦莊が刻行した康熙本『婦震川先生集』の校訂に大いに不満で、婦莊に書簡を送り、それがもとで両者は大喧嘩になった。汪は『婦文考異』を上梓するつもりでいたのだが、仲裁に入る人がいて、結局この計画は流れた。この手沢本こそは、ついに刊行をみなかつた『婦文考異』の草稿だったのだ。

クリックすると次の段にジャンプします。

錢鍾書著

『宋詩紀事補正』（全一二巻）

二〇〇三年・遼寧人民出版社・二二、〇〇〇円



前置きが長くなったが、このたび『宋詩紀事補正』（以下『補正』）という名で上梓された錢鍾書氏の遺著は、氏の手沢本『宋詩紀事』をもとに、構成されたものである。全一二冊。各冊の巻首に氏の手跡の写真が掲載されている。それを見ると、故人愛用の『宋詩紀事』（国学基本叢書、万有文庫本）は、淡墨や万年筆の書き込みでぎっしり埋まっている。

夫人で、文学者の楊絳女史の序によれば、この書の出版の経緯はこうである。まず、四十年代の末期に錢氏が万有文庫の『宋詩紀事』を入手し、ひととおり目を通して書き込みを終えたのが、一九四九年八月。錢氏が北京の清華大学に赴任した時のことである。その後、『宋詩選註』（人民文学出版社、一九五八年初版。宋代詩文研究会訳注『宋詩選注1』が今年一月に東洋文庫から出版された）の執筆の際にこれを加筆。八二年、錢氏の委託をうけた樂貴明氏が

▼『東方』278号より
一 よみがえった碩学の手沢本
▲ 野村 鮎子

これを整理して第一稿となるのだが、銭氏がこの段階でさらに遺漏を補充、第二稿は一九八四年に完成した。八十年代後半になると、世は電腦の時代に突入し、欒氏が電腦で入手した文献資料を銭氏が対校した。こうしてようやく第三稿が完成し、二〇〇三年の出版となったのである。銭氏は一九九八年に北京で逝去しているので、この出版を見ることはなかった。

銭氏は、現代文学では『困城』（邦訳『結婚狂詩曲』岩波文庫）の著者として知られるが、東西の文学に精通した碩学として、古典文学に関する業績も多い。とりわけ、宋詩のもつ創造性、つまり、唐詩を模倣した明詩などがとても及ばない創造性に早くから注目、『宋詩選註』は、幾度も版を重ねた。小川環樹博士は、この書を「収録する詩人の数も作品の数も、陳氏（陳淵『宋詩精華録』）の半に達しないが、個々の詩人に対する「簡評」と作品に附せられた注解とは、しばしば詳細であり創見も多く、今日までのすべての選本のどれよりもすぐれている」（『中国文学報』第一〇冊）と評している。

銭氏は『宋詩選註』の自序で、唐詩にくらべて宋詩の選本が作りにくい理由として、総集、別集から類書、筆記、地方志までひっきりかえさなければならぬ不便をあげるが、その時、氏を助けたのは、清初に編纂された呉之振『宋詩鈔』と鶚『宋詩紀事』であった。ただ、銭氏は「これら二書は大部の書であり、大いに役にも立つが、われわれがこれを用いるときにはいくぶん注意を要する」（『宋詩選註』自序二二頁）として、『宋詩紀事』の誤謬と遺漏に不満を漏らしている。

さて、『補正』の原書である『宋詩紀事』について少し説明が必要だろう。清初には、明における唐詩偏愛の反動

▶ トップページにもどる

として、宋詩再評価の気運が興った。鶚の『宋詩紀事』も、その気運の中で生まれた書である。「紀事」というが、それ以前の、たとえば孟『本事詩』や計有功『唐詩紀事』が詩にまつわる逸話を中心として構成されているのに対し、『宋詩紀事』は、詩人の小伝と、代表的な詩を載せるだけで、その詩には、逸話が無い。書物の性格からいうと、「紀事」というより「総集」と呼ぶほうがふさわしいかもしれない。ただ、今日のように宋詩研究の工具書が揃っていなかった時代には、ほとんど他に拠るべき文献が無かったこともあり、大いに珍重された。四庫提要の宋人別集の部は、『宋詩紀事』の錯誤や遺漏を発見しては、鬼の首でも取ったように「考証」するのだが、詩人の代表作を挙げるとなると、専らこれに頼りっぱなしである。余嘉錫などは、提要が宋詩を論ずる際に『宋詩紀事』を虎の巻として用いながら、それに触れないのは、掠美（手柄の横取り）にあたり、けしからんという旨のことをいつている（中華書局『四庫提要弁証』一三三〇頁）。

ただ、『宋詩紀事』に錯誤や遺漏が多いのも事実である。清末の陸心源はその豊富な蔵書をもとに『宋詩紀事補遺』（以下『補遺』）を完成させた。銭氏はこれに大いに不満を抱いていたらしく、陸心源『補遺』を、「錯誤百出の書」（『宋詩選註』自序二三頁）と評し、「野菜を買う時みたいに量の多さを求めるばかりで、精密とは程遠い」（『補正』題辭）と、手厳しい。本書の「補正」という名には、銭氏の自負が窺えよう。

銭氏の『補正』の内容は、補人、補事、補詩の三分野に及ぶ。補人とは、原書に採録された詩人数を拡充することであるが、銭氏は陸心源『補遺』のごとき猥雑を嫌って、詩人の大規模な補充はしていない。補事は、原書が引用し

た詩話や評論について字や出典の誤りを正し、時に資料を補完することである。補詩では、原書にある詩以外に、銭氏が詩人の詩風がよく現れていると見なした詩を補充する。別集のない詩人についても、諸書より佚詩を輯めている。

先述したように、原書の『宋詩紀事』は、詩人小伝とその後抄録された数首の詩から成っている。本書は、原書の体例はそのままに、銭氏の説は補正と明示して挙げていく。ただし、補正という名から、これを考証の仕事と判断するのは早計である。もちろん『紀事』が引く出典の誤りや鈔出の際の誤字脱字については、これを正してある。しかし、小伝の誤謬については、銭氏の『補正』は何も訂正していない。たとえば、『宋詩紀事』卷六一の洪咨小伝は、『宋史』が嘉定二年の進士に作るのに対し、鶚が考証して嘉定元年の進士と改めた。しかし、これは四庫提要が考証するように嘉定二年とすべきところで、鶚の失考である。銭氏の小伝補正は、洪咨の詩風について補足説明するだけで、登科の年については何もいわない。また、同巻の李劉小伝は嘉定七年の進士に作り、四庫提要もそれに従うが、明弘治『撫州府志』によれば、李劉は嘉定元年の進士である。陸心源『補遺』は嘉定元年と改めているが、このことについて、銭氏の補正は何もいわない。また、詩の補正であるが、『宋詩紀事』卷三七は王安中の詩を『清波雜志』から引き、詩題を「宣和七年十二月二十一日就睿謨殿張燈預賞元宵曲燕庶制」に作る。しかし、「宣和七年」は「宣和元年」の誤りであることは、劉永翔『清波雜志校注』（中華書局、一九九四）が考証するとおりである。銭氏は、字句の誤りを直すだけで、詩題の誤りについては何も言及していない。こうした例はいたるところに散見され、数え挙

▶ トップページにもどる

げればきりが無い。率直に言って、小伝についての考証は、陸心源『補遺』に及ばないし、収録詩人の規模をいうなら陸の『補遺』や孔凡礼『宋詩紀事続補』（北京大学出版社、一九八七）を超えはしない。詩の校勘についても『全宋詩』（北京大学出版社、一九九一―一九八）の刊行を終えた現今ではあまり意味をもたない。

しかし、これらは、いずれも「考証」学者の狭隘な見方に過ぎない。銭氏は詩人の生卒年や登科の年を考証するのに腐心したりしない。そもそも、これを「失考」としてあげつらうことなど無意味なのだ。本書は最初から考証の枠には収まりきらないものなのだ。

たとえば、卷三八陳与義小伝の補正は、かれを江西派に分類することの非を説き、卷六三徐小伝の補正は、江湖派について議論を展開し、同巻嚴羽小伝の補正は、『滄浪詩話』の文学観について論じた一篇の論文である。これらの代表的詩人についてはすでに『宋詩選註』に詩人「簡評」として掲載されている（というより、本書が先にあつて『宋詩選註』が生まれたというべきだが）。よって、本書の真価は、『宋詩選註』に収録されなかった詩人についての補正と、銭氏がどの詩を詩人の代表作と見なしたかという点にあるといえる。本書は、補正という名に借りた銭氏の『宋詩紀事』なのであり、ここには銭氏がその半生を傾注した宋代文学史観のエッセンスが詰まっている。碩学の手沢本から何を汲み取り、どんな啓示を受けるかは、我々後学に委ねられている。かくして、本書を伝記考証の工具書として利用しようとする浅学のたくらみは、見事に裏切られたのだが、それはむしろ心地よい裏切りであった。

ところで私は、工具書として利用することの愚を述べたが、この本の使いやすさは抜群である。鶚の原書と銭氏の

- ▼ 『東方』278号より
- 四 よみがえった碩学の手沢本
- ▲ 野村 鮎子

補正は字体を異にすることで截然と区分されており、見やすい。また、各冊の最初にはそれぞれ人名と詩の目次を載せ、第一二冊の末尾には作者索引が附されている。つまり、この『宋詩紀事補正』を買う人は、もう『宋詩紀事』を買う必要はなくなるというわけだ。ただ、本書を購入しようとする人が、『宋詩紀事』を持っていないはずもないだけだ。

[トップページにもどる](#)

[◀ 今月の『東方』](#)

[◀ 書評目次へ](#)